

水戸光圀公の房総紀行…ご一行の工程と宿泊場所

2023 年 8 月 1 日

我部山 民樹

1. はじめに

水戸光圀公が水戸黄門と呼ばれるようになったのは 1690 年、63 歳のときに隠居し、権中納言に任じられてからである。中納言の唐名が黄門であり、それで「水戸黄門」と称されるようになった。

第 2 代水戸藩主・徳川光圀公が 47 歳のとき、養祖母(父頼房の養母)・お梶の方(*1)の墓所の鎌倉・英勝寺に墓参するため、水戸城を延宝二年(1674 年)4 月 22 日に出立し、下総・上総・安房を経て鎌倉へ出向いた。そして 5 月 9 日に江戸小石川の水戸徳川邸に帰着している。この時の紀行文を「甲寅紀行」(こういんきこう)としてまとめている。なお、旅の途中の藩領南部では孝行農民への褒賞も行っており、藩領の巡検を兼ねていたと考えられている。

房総紀行は 4 月 26 日の神崎(こうざき、現・千葉県香取郡神崎町)から 5 月 1 日の勝山(現・千葉県安房郡鋸南町)までの間であり、その間のご一行の工程と宿泊場所を調べる。

*1. お梶の方(英勝院)

お梶の方(おかじのかた、1578~1642 年)はお勝の方とも呼ばれる。落飾(出家)後は英勝院と称した。

小田原北条氏の家臣だった太田康資の養女とされ、家康が江戸へ移った後に側室となった。聡明であり、その徹底した倅約ぶりから大御所・家康に絶大な信頼を得て駿府城の奥向きを一手に任されたという。娘の市姫の死後は、頼房(初代水戸藩主)を養子とした。鎌倉扇谷(おうぎがやつ)の地を徳川家光より賜り、菩提所として英勝寺を建立して住持する。

○英勝寺

神奈川県鎌倉市扇ガ谷にある浄土宗の寺院であり、現在、鎌倉唯一の尼寺である。



2. ご一行の経路と宿泊場所

水戸城→長岡→小川→玉造村→板久→常陸砂押→神崎(下総)→(舟と馬で)成田→酒々井→佐倉→千葉・寒川村→曾我野→浜野→村田村→八幡村→五井村→青柳村→姉ヶ崎→市場村→吾妻村→木更津→天神山の湊村→十宮坂(竹岡)→(舟で)勝山→湊→(舟で)三浦半島→鎌倉へ

○房総紀行経路図



○甲寅紀行他の史資料から見える光圀公ご一行の工程

年月日	甲寅紀行	その他の史資料
延宝2年 (1674年) 4月22日	風雨ス、辰ノ刻ハカリニ水戸城ヨリ首途(旅たち)ス、幕下ノ諸士皆送り来リ、長岡に到テ各辞シ去ル、晡時(ゆうがた)小川の館ニ至ル、四第一姪比ノ地に祖道(旅たちの安全を祈る)ス、終霄宴飲シテ、黎明ニ暗然トシテ別レ去リヌ。 (水戸城を出立。長岡に到って、小川の館に到る。)	
23日	微の雨フル、辰の刻小川ヲ出テ玉造村ヲ過ル、此地ニ村民弥作ト云者アリ、至孝国中ニ	

	聞コヘタリ、事ハ別記ニアリ、自ラ黄金十両ヲ投シテ、イササカ其孝行ヲス、ソレヨリ数里ノ原野ヲ歴テ（めぐって）、上ノ道ヨリ築地ノ妙光寺ニ至ル、薄暮の比、板久ノ旅館ニ著ク （玉造村を過ぎて、築地の妙光寺に到る。薄暮れに板久の旅館に着く。）	
24 日	雨ノ小止ナカリシ故ニ信宿（二泊）ス、亭午（正午）ニ舟ヲ浮ヘテ江浦ニ樟シ、鳥銃ヲ放テ竹鷄ニ翼白鷺三翼ヲ得テ無聊ヲナクサメタリ （雨天のため、連泊する）	
25 日	天晴ル、辰ノ刻館ヲ出テ船ニ駕ス、近侍ノ士行ヲ送ル、五六人此所ニテ暇ヲ賜ヒ、各水濱ニ坐シテ別去ニ忍ヒス、遂ニ纜(ともずな)ヲ解テ一帆ノ風ヲ快クス、諸船皆風ニ流テ遡リ、若干ノ島嶼(とうしょ、大小さまざまの島)ヲ廻リ、上戸牛堀ヲ望ミ、午ノ刻過ル比ニ押沙ニ至ル、曾根興五右衛門御代官所ナリ、祥雲寺ト云フ禪院ニ寓ス、山號ヲ龍浦山ト云、開山ハ下総国伊能ノ荘、佐賀崎村ノ長興院第三世ノ齡泉和尚ト云僧ナリ、長興院ハ総寧寺ノ末派ニテ、高山和尚ト云僧開基ノ地ナリシトソ （船で移動。押砂に到る。祥雲寺という禅院に寓す。）	常陸押砂の旅宿 （酒々井風土記）
26 日	辰ノ刻押沙ヲ出、一葦(いちい、一そうの小舟)ニ乗シテ川ヲ渡ル、此川常陸ト下総ノ境ナリ、遂ニ神崎ノ神社ヲ見ル、何ノ神ト云コトヲシラス、神崎明神ト云、北條家ノキ文状等アレトモ、分明ニ見ヘカタシ、千葉の系図モアレトモ、微トスルニ足ラス、社ノ左ニ	小舟で川を渡り、下総・香取の神前(こうざき)神社を参詣し、馬に乗り換え成田山新勝寺を参詣したのち、伊篠(いじの、酒々井の大字)を経て、印旛沼を眺める中川を

	大老樹アリ、枝葉長大ニシテ橡樟(くぬぎ)ニ似タリ、社司長門カ云、此木は神木ナリ、昔ヨリ樹名シレスト云、後ニ上総ノ湊ニ至テ樟木ヲ見ルニ、果シテ此社ノ樹ト同ジ、神崎ノ社ヨリ還テ、又船ニ駕シ、スルコト十二三町許ニ邑吏(ゆうり、村役人)網ヲ河辺ニ張りテ魚ヲ捕シム、鯉三尾ヲ得テコレヲ進ム、小社有、現田ノ社ト云、此ヨリ馬ニ乗テ小野奈野須ヲ通り、助崎・・・(以下、原文未入手)	通り、午後 3 時過ぎに酒々井宿に着きました。和泉守が宿所に用意した酒々井仲宿にある地蔵院(*2)に宿泊、地蔵院は代々の佐倉藩主が幕府の野馬役人や参勤交代の休息所として営んでいた。略(酒々井風土記)
27 日	千葉・妙見寺(千葉神社の前身)、寒川村を通り、曾加(我)野村で休む。大岸(巖)寺を見て、浜野を通り村田村を通る。村の出口に草刈川があり、舟橋をかけて接待してくれた。この川は村田川ともいい下総、上総の境界の川である。川を渡って南の地は上総の地である。八幡村という。五井村を通っていくと、青柳村と飯沼村との間に二井河(現・養老川)が流れ、飯沼川とも言っている。橋がないので歩いて渡る。それから姉ヶ崎に入る。 妙経寺(みょうきょうじ)(*3)に宿泊。 この寺は妙満寺(京都)の末寺で昔は真言宗であったが、日暁がこの寺に来てから法華宗となったのである。日蓮自筆の曼荼羅があり長さ一尺余。四代の御朱印四通がある。現将軍家綱公の御朱印(寛文五年)には天羽郡としてあり、御朱印を年号に捺してある。(*4)この地は伊丹大隈守勝政の領分で、松平出羽守綱隆の鷹場であり、この寺は出羽守の旅館であってよく作られている。	・村田川渡船場跡 渡船場が設けられ、明治 7 年に架橋されるまで、人びとは渡し船で対岸へ渡っていました。水戸黄門として知られる徳川光圀がこの地を通過した際には、船を並べて繋いだ上に板を渡した船橋をかけて渡河し、飯香岡八幡宮や姉崎の妙経寺を訪れました。(広報いちはら)

	(「随想 市原史話、『甲寅紀行』から行程を紹介する」より)	
28 日	・ソレヨリ市場村に到る、左の方に坂戸大明神の社、少し許高き丘阜(きゅうふ、丘陵と同じ)の上ノ林中ニ有ナリ、社人カ云ク、手力雄命(たじからおのみこと)ヲ勅請シクル也、故に天岩戸ノ流落タル河トシテ、巽の川ヲ浮戸ト云也、里俗ニウケト、云ハ誤ナリ、東北ニ小村アリ、次郎丸ト云、次郎戸ノ落タル所ナリト云テ、二番目ノ戸の落タル地ナリトソ、又カノト云村近辺ニ有、ソレニハ八剣池ト云アリ、堀ノ形長蛇ノ如シトナリ、御当家四代ノ御朱印社領少シ許有、ソレニハ上総国望陀郡中嶋郷市場村坂戸明神トアルナリ、六月廿七日大ナル神事有、金勝寺ト云寺近所ニ有、神宮寺ノ如ク相守ルナリ、鳥井ニ坂戸大明神ト云額有、市場村ノ末ニ川アリ、市場川ト云ナリ、徒歩渡リナリ、馬ノ太腹鎧ノ上ニノル程ノ水ナリ、此上ハクルリト云所ナリ、ソレヨリ吾妻村、入口ニ山王ノ小祠アリ、遂に木更津ニ至テ憩フ。 ・二十八日午後、館を出てすさい川(周西川)を渉りこいと川(小糸川)を越え、あいのやの台に至る。海向ひに猿島見ゆ。佐貫村に至る。此より松平山城守重治が領地なり。此所に出船入船の岩あり。ふつと村(富津村)より、向地の相州等よく見ゆ。この地の洲崎より海の中へ出洲あり。上方道二里半ほど出づるなり。それより天神山の湊村(※5)に着き	・翌二十八日辰の刻に姉ヶ崎を出立、静村、奈良輪を通り市場村へ着く。市場村の出口に川があり市場川という。徒歩で渡る。…… この後、木更津、佐貫村、天神山(宿泊)、勝山村、湊(天候悪化のため二泊)、その後、湊から舟で三浦半島に渡り五月二日に鎌倉入りをし、五月九日江戸小石川邸に帰着している。 (随想 市原史話・・・『甲寅紀行』から行程を紹介より) ・「左の方に坂戸明神の社(現袖ヶ浦市)が少し小高い丘の上の林の中にあり、社の人が言うには手力雄命を観請しています。その近くめに、天岩戸の流れ落ちた河の巽の川は浮戸といいますが、俗にウケトと言うのは誤りです。またカノという村が近くにあり、そこに八剣池とか蛇堀と言われる池があり、堀の形が長蛇のような形でした。徳川家 4 代の御朱印の社領が少しあります。それは上総の国望陀群中嶋郷市場村の坂戸明神にあるとしています。」(「水戸黄門が歩いた坂戸神社」より) ・沖中の自噴の井戸 「甲寅紀行」に「沖中に清水湧き出づる井あり、塩氣少しもなし、人みな此の水を飲みて長途の渴を止む」との記載があります。(「根形公民館報ねがたびと」より)

	て宿す。この湊、廻船漁舟の津なり。平山城守重治が領地なる故に、饗応丁寧なり。（「水戸黄門が歩いた路」の「甲寅紀行」を抜粋）	
29 日	辰の時(8 時)旅館を出づ。南の方に宇留戸川(売津川)を渡る。西に向かいて行けば、坂あり。十宮坂と云ふ。辻堂あり。十王堂(*6)なるべし。内は空虚なり。この地より軽舟に乗じて行く。西の方に猿島・夏嶋・御旗山・鎌倉山・走水・鴨居村・浦川の湊等見ゆるなり。 （「水戸黄門が歩いた路」の「甲寅紀行」を抜粋） 勝山村（現安房郡勝山町）、湊	・（市場川を渡り）この後、木更津、佐貫村、天神山（宿泊）、勝山村(*7)、湊（天候悪化のため二泊）(*8)、その後、湊から舟で三浦半島に渡り五月二日に鎌倉入りをし、五月九日江戸小石川邸に帰着している。（「随想 市原史話・・・『甲寅紀行』から行程を紹介」より） ・大正時代の湊川の川口風景画像左、木の茂みは十宮山薬王寺(竹岡)で、徳川光圀はここから船に乗り勝山まで渡った。  ・竹岡のヒカリモ  延宝 2 年(1674)には、水戸黄門の呼び名で知られる徳川光圀（とくがわみつくに）がこの地方を旅行し、紀行文に「黄金花」と記録

		しています。（「富津市の「広報ふつつ」より）
30 日		・勝山の大黒山で休憩し昼食をとった光圀は、浮島や鋸山の景色を堪能した後、鋸山の難所を越えて、鎌倉へ向かいました。（鋸南町ホームページ「水戸黄門がやって来た」より） ・浮島は景観の特異さで知られていたらしく、延宝二年（一六七四）に訪れた徳川（水戸）光圀は『甲寅紀行』に「岩石嶮屹、秀奇にして多景」と記している。（知識探訪サイト「ジャパナレッジ」より） ・湊に宿泊（悪天候のため2泊）（「随想 市原史話」より）
5 月 1 日		・湊から舟で三浦半島に渡る。（「随想 市原史話」より）
5 月 2 日		・金沢（現六浦）の瀬戸橋に着き、その日の夕刻に水戸藩が建てた英勝寺に到着。 鎌倉では英勝寺を拠点として名所・名跡を訪ねた。（ウイキペディア「鎌倉日記」より）
5 月 8 日		英勝寺より帰路につき、藤沢の清浄光寺（通称・遊行寺、時宗の総本山）に寄り、神奈川宿に宿泊（ウイキペディア「鎌倉日記」より）
5 月 9 日		江戸小石川の水戸徳川邸に帰着（ウイキペディア「鎌倉日記」より）

*2. 地藏院

地藏院は延命山[えんめいざん]地藏院といい酒々井横町の東光寺の下寺[したでら]でした。江戸時代の絵図には中宿の東に地藏院とあります。

元禄二(1689)年十月十九日名寄帳[なよせちょう]には「地藏院屋敷」、寛延三(1750)年『佐倉藩年寄部屋日記』には野馬奉行「旅宿酒々井地藏院」とありますが、天明六(1786)年以後の野馬奉行の宿は勝蔵院に替わっ

ています。おそらくこの間に地蔵院は取り壊されたのでしょう。いまは小さな地蔵堂が建っています。(酒々井風土記より)

酒々井地蔵院跡



*3. 妙経寺

日暁上人を開基として寛正元年(1406)創建、天正 19 年(1591)には徳川家康より寺領 10 石の御朱印状を拝領し、塔頭 10 坊、数多くの末寺を擁する中本寺格の寺院だったといわれる。



(1880 年、広瀬盧竹作の「姉崎町年中行事」より)



(現在の妙経寺)

*4. 曼荼羅と御朱印

日蓮自筆の曼荼羅



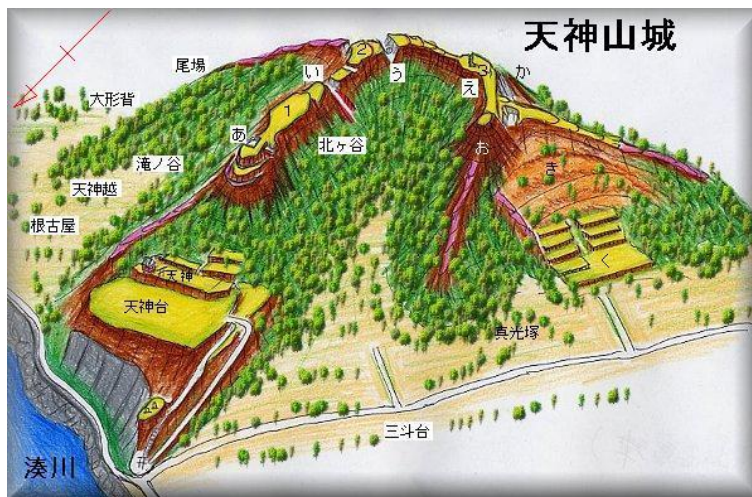
徳川家の御朱印状



*5. 天神山の湊村

篠毛村(ささげむら)の南に位置し、湊川が西方で浦賀水道に注ぐ。房総往還が通り、馬継場であった。湊浦が置かれ、「甲寅紀行」に廻船漁舟の津なりとある。文禄三年(一五九四)の上総国村高帳に村名がみえ、高五六九石。元和九年(一六二三)から寛永一一年(一六三四)まで旗本松平領、のち幕府領を経て同一五年から松平領。寛文四年(一六六四)当時佐貫藩領であった(「松平忠勝領知目録」寛文朱印留)。貞享元年(一六八四)からは幕府領(菱田家文書)。正保国絵図では湊町として同高が記載され、舟渡一 間とあるので、湊川の対岸海良村(かいらむら)への渡しであろう。

天神山には、かつて天神山城があった。武田や里見の城で、最後は北条の城だったとも伝えられている。天神山城は、上総湊港から湊川を遡ること1km、湊川を北に臨む天神台と呼ばれる比高90mの急峻な山上にそびえていた。城址内には天神社や報恩寺がある。眺望がすばらしく晴れた日には海のかなたに富士山を望むことができる。



*6. 十王堂「十宮山薬王寺」

竹岡地籍の十宮山薬王寺



*7. 勝山村

龍島村の南に位置し、房総往還が通る。地名は古くは加知山・賀知山と書き、カチヤマとよんだ。また近世初期には二浜(にはま)村の称もあった。西は海(浦賀水道)に面して入江が発達し、沖には浮島が浮ぶ。入江と天然の防波堤の役目を担う浮島の存在とがあいまって、隣接する獺島(龍島)などとともに早くから入海(東京湾・浦賀水道)の主要な湊として開けていたものと考えられる。浮島は平安初期に成立した「高橋氏文」に景行天皇行幸の伝承が載せられ、下って戦国期には妙本寺住持・日我が一時身をよせるなど(妙本寺文書)、その景観と併せて古くから当地方の特殊な地として意識されていた可能性もある。徳川光圀は延宝二年(一六七四)安房を訪れ、「甲寅紀行」に浮島を「岩石嶮屹、秀奇にして多景」と記している。また戦国期には現在の勝山漁港を取囲むように勝山城が築かれており、同城は当時の入海における典型的海城(湊城)であったとみられる。

浮島(光圀公が「岩石嶮屹、秀奇にして多景」と記した。



勝山城

勝山城は里見水軍の本拠地として使われた城です。築城時期は定かではありませんが、「治承の乱」における石橋山合戦に敗れ、伊豆から逃れた源頼朝を、この地の豪族・安西氏が出城に迎え入れたと伝えられています。江戸時代初期に里見氏が改易となると内藤清政が入封し、山麓に勝山陣屋を築いたので廃城になったと思われます。現在城址周辺はハイキングコースになっており、堀切などの遺構を確認することができます。

*8. 湊浦(湊川河口部)

[現在地名]富津市湊

浦賀水道に置かれた湊で、湊川河口部にある。年貢米などの津出湊で上総湊と称されるが、史料上は湊浦のほか湊村浦などとみえる。元禄三年(1690年)の幕府廻米津出浦々河岸之道法并運賃書付(徳川禁令考)に金谷浦・湊浦とあり、海上一五里の江戸まで運賃は米一〇〇石につき一石三斗であった。年貢米の津出しとして利用したのは文化八年(1811年)当時の相野谷村(高橋家文書)・売津村(梶山家文書)、慶応元年(1865年)の岩坂村・志駒村(山岡家文書)などが知られる。

○経路をまとめる



○湊周辺の地図



3. 水戸光圀公ご一行の人数と宿泊場所について

甲寅紀行時の随行人数の資料が見つけれないので、他資料より推測する。

水戸藩は徳川御三家の中でも唯一参勤交代を行わない江戸定府の藩であり、万が一の変事に備えて将軍目代の役目を受け持っていたともいわれている。従ってその資料はない。

○大名ご一行の移動事例を調べる

大名の江戸からの帰路	随行人数	宿泊場所
・光圀公(引退後の 66 歳の時)が、1695 年 1 月、江戸藩邸から西山御殿(隠居所)への帰路 (匝瑳探訪「飯高を歩く光圀一行」より)	総勢 334 人 随行者は側用人、賄い人と包丁人、医師、馬 5 匹を管理する馬屋衆、かごを担ぐ籠衆、飛脚などだった。	・随行者は太田村と成田村(現・旭市)の農家に分宿した。 光圀公の宿泊場所についての記述が無いが、寺院や庄屋宅だったのだろうか？
・水戸藩 7 代藩主・治紀(はるとし)が 1803 年、江戸から国元に入ったときに領内を巡	藩主以外的人数が 360 人 家老や奉行、目付をはじめとする藩士とその家来、賄方や医師、藩に	・長倉村宿泊時は、藩主は庄屋宅に、そのほかは寺院や宿、一般農民宅など 33 軒に分宿。

視。水戸光圀公以来の巡視。 (建設未来通信社「茨城の歴史点描 51 の‘水戸藩主の領内巡視’」より)	仕える茶人や藩主の身の回りの世話をする「坊主、雑用に従事する中間などまで同行していた。	
・参勤交代 (横浜国道事務所「東海道への誘い。宿場について」より)	小さい藩で 100 人ほど、大きい藩では 2,000 人から 3,000 人前後、加賀藩では多い時に 4,000 人にもなった。	大名は本陣(江戸時代以降の宿場で、身分が高い者が泊まった建物)に泊まるが、家臣らは宿場内の旅籠屋に分宿し、時には周辺の寺院も使うことがあった。一つの宿場ですべての人員を収容できない場合は、前後の宿場に分散して泊まることもあった。
紀州藩主の参勤交代	武士 1,639 人、人足 2,337 人、馬 103 頭だったとの資料がある。	

光圀が隠居後、江戸からの帰路に 334 人が随行し、7 代藩主の江戸からの帰路には水戸光圀公以来の巡検も兼ねて、360 人が随行している。徳川水戸家・藩主して、領内の巡検を兼ねたとされる光圀公の甲寅紀行には、**少なくとも 350 人以上が随行したと容易に推測することができる。**

4. ご一行の宿泊場所

甲寅紀行に具体的に書かれている光圀公の宿泊場所は姉崎の妙経寺だけである。参勤交代の宿場では陣屋があるだけでなく、参勤交代の一行の宿泊をビジネスとして取り組んでいた旅籠や寺社があったが、房総紀行の宿泊地にはそうではなかった。姉崎においても、おそらく一度だけの大名ご一行の宿泊場所の選択であり、あっせん者は相当苦勞したに違いない。姉崎の妙経寺のように大名やその身内が鷹場(*9)で常宿にしていた寺院は、安全で設備も整っていたのであろうから最優先に光圀公の宿泊場所に決定されたのであろうし、有力な旅籠や庄屋宅も候補だったのであろう。そして随行者は旅籠、庄屋(名主)宅や豪農の家に分宿したのであろう。宿泊を受け入れて今も存続している一家には下賜された品々や伝承が残っているのであろうが、酒々井の地藏院のように廃寺になってしまっているところもあるし、すでに廃業した旅籠、離散してしまった庄屋や豪農には、下賜された品々も散逸し、伝承も残されていないであろう。

*9. 鷹場

領主が放鷹（ほうよう）（鷹狩）を行うために設定した狩猟の場。江戸時代に鷹場を持ち得たのは将軍と大名だけである。

5. さいごに

甲寅紀行のうちで姉ヶ崎での宿泊場所の妙経寺については詳しく書かれているのは、寺の所有地 10 万石を安堵する徳川家の御朱印 4 通と日蓮の曼荼羅の印象が強かったのかもしれないが、この地を鷹場としていた出雲松江藩主・松平出羽守綱隆（父親・松平直政は家康の孫で、上総姉ヶ崎藩主、越前大野藩主、信濃松本藩主を経て出雲松江藩の藩主となった。）の旅館（常宿）としてよく作られていたからかもしれない。

妙経寺に宿泊した光圀公と近侍以外の随行者はいずこに分宿したのだろうか？ 350 人以上と思われる随行者の宿泊場所は少なくとも 20～30 軒に及んだであろう。この地域の有力な旅籠や庄屋（名主）の家には当然分宿したはずだ。宿泊に協力した旅籠、庄屋、農家には、格別の感謝の意を示す謝辞と謝意を示す品々が下賜されたであろう。そしてその一家には‘光圀ご一行様が宿泊された’という伝承が残されたであろうが、多くは長い年月を経て、廃業や没落に伴う離散によって、その伝承が途絶えてしまったであろうし、光圀公から賜った品々は散逸してしまったであろうことは容易に推測することができる。

光圀公の房総紀行から 21 年後の 1695 年、「お竹騒動」（*10）により姉ヶ崎地区の名主 7 名が遠島になっている。ご一行分宿の有力な候補である。7 名の名主の家に分宿したのなら、その一家は離散してしまったのでであろうから、当然、その伝承が残るわけがないだろうし、この地域での光圀公宿泊の伝承も限られてしまうことになる。

*10. お竹騒動

1695 年、五代将軍綱吉が「生類憐みの令」を發布するなか、姉ヶ崎で幕府の許可を得て害獣狩りの最中、深城地区の山中で鹿と間違えて「お竹」という婦人を撃ち殺すという事件が起こった。犬一匹殺してもお咎めがあるこの時期、まして人を殺してはどのようなお咎めがあるか、関係する姉ヶ崎、片又木、立野、不入斗、深城、天羽田、長谷川の七ヶ村の名主は相談のうえ、この件を内密に収めることにした。ところが、これが幕府の耳に入り七名の名主は遠島となり、次郎兵衛は伊豆の大島に、土地家屋は没収となってしまった。これが「お竹騒動」と言われる事件だ。（忠僕・市兵衛の物語につながり、有名になった事件）

一般的な話として、光圀公のご一行が宿泊された家系が繁栄し存続したとしても、長い間に伝承が「光圀公ご一行がご宿泊」から、「水戸黄門さまご一行がご宿泊」に変わったとしても一向に不思議ではない。水戸黄門漫遊記は江戸末期に講談師が創作

したとされ、一般に普及してきた。「水戸黄門さまご一行」と聞いた人はその印象に引きずられ、随行者の人数や宿泊の規模が矮小化されて、「水戸藩主・光圀公が少数のお供とともに旅籠に宿泊した」と錯覚してしまうのではなかろうか？

なお、妙経寺のゆかりの人に関する資料の中に「小林一茶、木更津の俳諧仲間（＊11）を尋ねる途中に妙経寺に立ち寄って、丁子屋（現・姉ヶ崎ロイヤルホテル）に宿泊した」とあり、当時から立派な旅籠だと容易に想像できる。

＊11. 木更津の俳諧仲間

一茶が上総・安房俳諧行脚の途上、この上総の玄関口である木更津に陸路から5回、東京湾を渡航して海路から7回、計12回も訪れ、俳僧・雲哉がいる鶏頭山西休院選擇寺（せんちゃくじ）を常宿とした。（杉谷徳蔵著；小林一茶と房総の俳人たち）

ご一行が妙経寺以外に、どこに宿泊したのかについての史資料はないが、名主の家や姉ヶ崎地区の有力な旅籠「丁子屋」に、分宿したことは想像に難くはない。丁子屋は「あねがさきロイヤルホテル」として、今日も健在である。当時のこの地域における他の旅籠に関する情報は一切承知していない。

房総紀行に関する甲寅紀行や水戸義公全集（徳川圀順編）の全文を入手できなかったこと、それに甲寅紀行の随行者に関する記録を入手できなかったことに悔いが残る。

参考資料

- ・甲寅紀行；水戸光圀公
- ・「随想 市原史話；小幡重康氏（市原地方史研究 第十八号掲載 平成6年）
- ・酒々井風土記「黄門様と酒々井宿 地蔵院」；酒々井教育委員会学習課が多くの記録や伝承をまとめたもの
- ・鎌倉日記；光圀自身を書いた旅日記ではなく、それを纏めたのは家臣吉弘元常らであることが巻末に記されている。
- ・水戸黄門が歩いた路；じのもんた氏
- ・水戸黄門が歩いた坂戸神社；内藤浩信氏
- ・茨城の歴史点描 51「水戸藩主の領内巡視」；建設未来社
- ・匝瑳探訪「飯高を歩く光圀一行」；匝瑳市文化財審議会委員 依知川雅一氏
- ・横浜国道事務所「東海道への誘い。宿場について」より
- ・富津市の「広報ふつつ」
- ・鋸南町ホームページ「水戸黄門がやって来た」
- ・知識探訪サイト「ジャパンナレッジ」
- ・日本の城
- ・小林一茶と房総の俳人たち；杉谷徳蔵著

以上